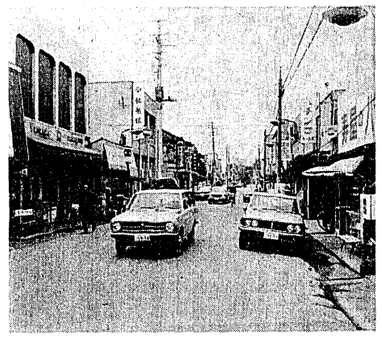
本町通商店街が一本化

駐車場　アーケード　など難問に対処

「新潟・新発田という大商圏にはさまれて、豊栄の商業はたいへんむずかしい」という商店街が、新潟・新発田へと行かざるを得ない」という消費者のこえも聞かれます。



（写真は近代化が望待される本町通商店街）

こうしたなかで、市街地の中心、葛塚本町通り（上町、中町、下町）の商店街の一本化が望まれていました。この本町通り商店街振興会（山尾吉郎会長）が結成され、市商業振興対策協議会（中川精治会長）で行われている折から、この振興会のこれからの活動が注目されます。

こうしたことから、いっそのこと分館を建設すべきだという意見もありますが、十分な広さをもった分館を造るには数億円のお金がかかり、いまの市の財政状態からしても無理です。また、ここ三カ年間の事業計画を定めた総合計画実施計画でも、財源の不足からこの期間中の建設着手は見込まれない状況にあるため、応急措置として現庁舎の増築を行うことになったものです。

計画では、現庁舎東側の一階部分を二階にするなど、延四百九十五平方㍍（約百五十坪）を増築し、事務室、書庫などを拡げます。工事期間は約半年くらいかかる見込みです。なお、これができ上がると、社会福祉事務所は本庁に統合されることになる計画です。

「駐車場がない。アーケードがない。自動車がひんぱんで安心して買い物ができない……」など、たくさんの問題点をかかえているところだけに、このたびの振興会の結成には本町通りのほとんどの商業者が趣旨に賛同しています。

設立総会では、役員を選出したあと、規約を決めましたが、「会費が安すぎる。活発な活動を行うには、もっと値上げすべきだ」などの意見もあり、熱心な意気込みが感じられました。

ことしの活動目標としては道路、駐車場、アーケード（歩道）、経営合理化などの部会を設けて、調査、研究、計画の立案などを行うことになっています。

市商業のあり方が問われ、この検討が市商業振興対策協議会（中川精治会長）で行われている折から、この振興会のこれからの活動が注目されます。

市役所庁舎を増築

―分館は当分むり―

市役所庁舎を増築することになり、一般会計補正予算でこの増築費四千六百万円を計上しました。この財源は、庁舎分館建設基金として、さきに積み立てていたものです。

この庁舎は、昭和三十七年に建設されましたが、職員数が増え、いまでは社会福祉事務所、教育委員会、農業委員会などの機関が分散しており市民のみなさんにも大変不便をおかけしています。

昭和三十七年当時と現在とを比較してみると、市の人口は約四千人増えており、それに伴う事務量の増加で市の職員数が増えていますが、そのほかさらに当時はなかった業務、たとえば社会福祉事務所の設置、あるいは交通公害などの業務が加わって職員数は大幅に増えました。

現庁舎に移転したころにはこの庁舎内で百三十七人の職員が執務していました。現在本庁舎に執務している方が望ましい職員数は、当時よりも約六十人増え、二百十人あまりになりますが、庁舎が狭いために分散しているのが実情です。

最近では会議室を事務室

増築は当分むり

県知事選挙の結果

新潟県知事選挙は、三月二十七日に告示され、四月二十一日に投票が行われました。

選挙の盛り上りが少なかったことに加え、終日二十消をこえる強風が吹き荒れたことなどが災いして、投票率は五六・九七㌫にとどまりました。開票の結果は、次のとおりでした。

浦沢与三郎	二、一三八票	
松沢　俊昭	四、二一九票	
君　健男	七、一〇六票	
有権者数	二四、〇八一票	
投票者数	一三、七二〇票	
投票率　男	六一・一三㌫	
女	五三・一一㌫	
計	五六・九七㌫	
有効投票	一三、四六三票	
無効投票	二五四票	

新農村甲二

「かい」一本で移住の地

潟干拓で生活も一変

部落・町内めぐり　～12～

葛塚駅から通称神山線（葛塚停車場山倉線）を南へ三・五㌔ほど行くと福島潟の堤防に至ります。潟はいま、干拓によって畑に生まれかわろうとしていますが、この堤防の左側に沿って新発甲二があります。世帯数九、人口四十四人の小さな部落です。（写真）

福島潟には、その堤防に沿って、いくつかの部落がありますが、北側から前新田沖、新発甲一、新発甲二、内沼沖、新発乙、その先は笹神村です。これらの部落は、いずれも最近まで福島潟干拓工事が行われるまでは、住宅のすぐ前まで一面の水面があるいはアシ原となっていました。

むかし

「わたしの先祖は、舟のかい棒一本あれば生活できると明治の中ごろにここへ移住してきたと聞いています」と部落のおとしよりが話してくれましたが、大正の末ころまでは、部落の前はガッポ（まこも）一本はえていない洋洋たる湖面で、南西のいわゆる「クシ」のかぜのときには、波が堤防をこえてきたものだといいます。

漁業が主で、獲物は葛塚、水原、新発田の市（いち）へ売り出されましたが、舟で行けないところは徒歩で天秤で運搬していました。

地主が干拓を奨励していたので、地先を開墾すると小作権が与えられました。干拓の方法は、比較的浅い沼地へまこもの苗を植え、幾年かたって沖積が進んでくると、周辺の湖底から泥をかき上げてこの上にのせて、苗を植え付けるというもので、大変な苦労をしたといいます。宅地をつくるのも大変で、山倉川や本田川などの落ちロへ行き、ジョレンでこの土を舟に積んで運搬してきたそうです。したがって畑をつくる余裕などなく、部落内に野菜がつくられはじめたのは、昭和三十年以後、神山線が開通してからだそうです。

隣接する内沼沖とともに無電燈部落であったのが、昭和二十八年七月二十五日に電燈がともり、部落をあげて祝賀会を行い、渇岡神社境内で映写会が開かれたことは、まだ記憶に新しいことです。

いま

国営干拓で潮底が姿をあらわし、生活の場であった福島潟が一変しました。舟もかいも用済みとなり、漁業が他の職業に切りかわりました。

神山線は、本市と笹神村を結ぶ動脈であり、県道に昇格して改良が進んでいます。そして舗装されるのも時間の問題のようです。

かつて、生活の場を福島潟に求めて移住したこの一帯の人たちは、いままた、干拓によってその生活を大きく変えようとしています。

生産所得は100億円こえる

47年市民所得推計

市商工公害課では、このほど四十七年の市民所得推計をまとめました。

生産所得

これによると、四十七年に市内の各産業が生み出した純生産額は、はじめて百億円をこえ、百四十四億七千四百四十万七千円です。前年にくらべて二二㌫（県平均は一五・九㌫）と大幅なのびをしめしています。産業別の構成割合は、第一次産業（農業など）二一・一七㌫、第二次産業（建設業、製造業など）二六・六㌫伸びて四十八万八千六百三十八円です。県平均は五十五万八千百三十二円ですから、これの八七・四㌫、第一次産業の割合が増えるという傾向にあります。

就業者一人当りの純生産（労働生産性）は、七十八万六千八十円です。県平均は九十六万一千五百七十三円ですから十七万五千円あまり県平均より低くなっています。

分配所得

市民が経済活動に参加し、その対価として得た分配所得の総額は、百六十四億六千九百六万八千円です。前年にくらべて三〇・一㌫とかなり大きな伸びをしめしました。

構成割合をみると雇用者所得が五八・三三㌫、個人業主所得が二四・四八㌫、個人財産所得一六・五九㌫などとなっています。前年の構成割合にくらべて雇用者所得が三・六四㌽増えたのに対して個人業主所得が逆に五・四三㌽減りました。

市民一人当り所得は前年より二六・六㌫伸びて四十八万八千六百三十八円です。県平均は五十五万八千百三十二円ですから、これの八七・四㌫、第一次産業の割合が（前年は県平均の八〇㌫）に当り、前年よりも県平均に近づきました。

豊栄ライオンズ・クラブ結成

十月ころには認証

社会奉仕団体のライオンズクラブが、豊栄にも結成されます。

クラブの名称は豊栄ライオンズクラブで県内では四十八番目の結成です。会長は戸田東三郎さん（白新町）で、事務所を平松測量事務所内（内島見）におき、毎月第一、第三土曜日に例会が開かれることになっています。

なお、認証は、十月ころになる見込みだそうです。

五月十二日、葛塚中学校体育館で会員三十七人と近郊の友好クラブの代表など、約三百人参加して、盛大でした。